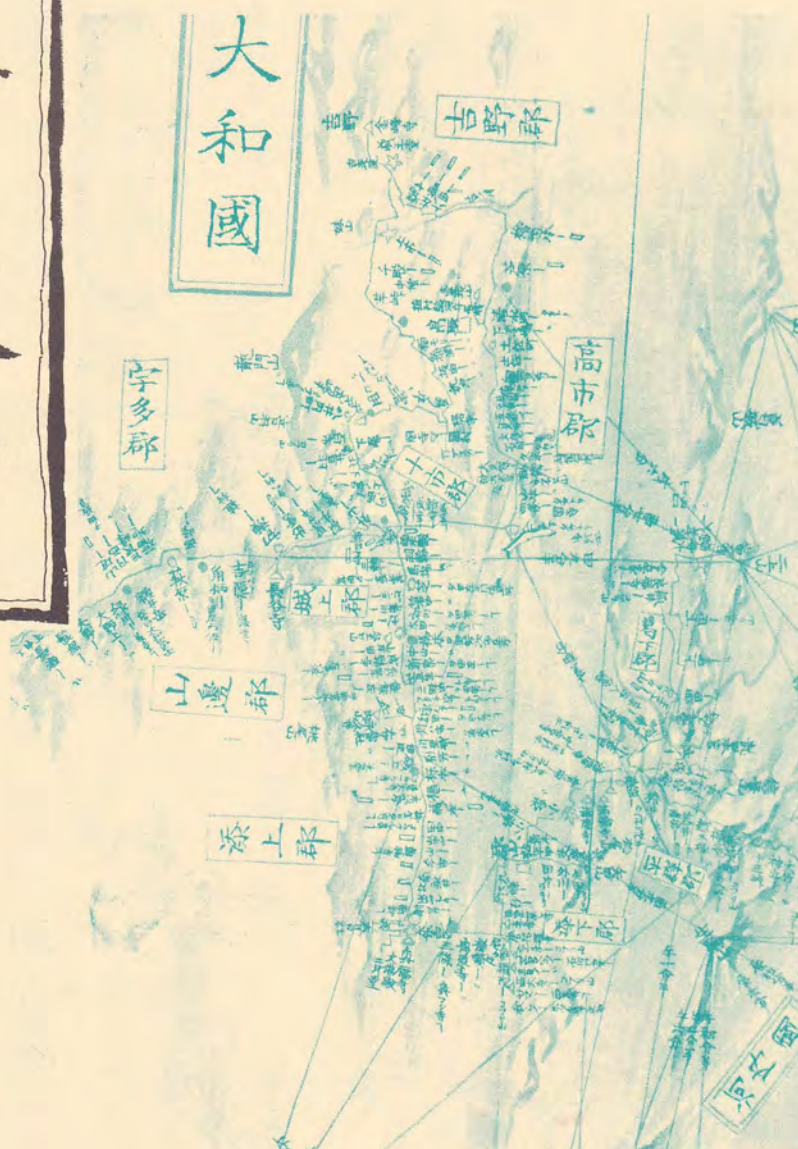


季刊 史料と伊能図

伊能忠敬

研究

一九九八年夏季 第一六号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 宮城県図書館蔵 文化四年中図(部分) 大和

学習院大学所蔵の中図と同じような九州測量完了前の既存中図の組み合わせ図が宮城県図書館にも所蔵されている。仙台藩伊達家の旧蔵品である。彩色の明るい写本で、学習院図と同じように中図でありながら領主名も記入されている。

蝦夷地、奥州北部、同南部、東海・東山道(東)、同(西)、畿内中国沿海の七部構成であつたらしいが、蝦夷地と奥州北部は欠本となつている(戊申戦争の際にでも持ち出されたのであろうか)。

本図は畿内図のうち大和の一部であるが、実物は橙色が強くないへん明るい感じである。山景の描き方は簡単で、イタリアの中図の山景とよく似ている。領主名、地名の記入には○○知行所、○○領、○○村と書くところを、知行所、領、村などの文字を省略して——で済ませている。地図合印はもちろん手書きである。方位線はやや太い。描画全体は特に丁寧ということではない。いろいろ考え合わせると、本図は仙台藩で実用上の必要があつて急いで写した図ではないかという感じがしてならない。

また、手本とした原図は学習院中図、イタリア中図と共通と思われる。もしかしたら、学習院中図が原本かもしれない。仙台藩の藩政史料のなから、本図入手経過のようなものが出てくればおもしろいと考えている。

(渡辺)

〔題字は忠敬の筆跡〕

目次

(表紙写真解説) 目次

巻頭エッセイ

伊能忠敬についての覚書

とてもいい企画展でした

座談会

江戸博「伊能忠敬展」とNHK「堂々日本史」をめぐって

トピックス1

「伊能忠敬展」に関するアンケート

地域史料

愛媛県温泉郡中島町の町史資料より

史料紹介

伊能家文書紹介 九

●桑原隆朝

●苗代川

●芳名録のこと

研究ノート

歴史のなかの伊能忠敬 二

●「緯度」と「経度」の探求

エッセイ

忠敬さんは歩測がお嫌い 一

トピックス2

都立中央図書館蔵「伊能小図」の発見から展示へ 渡辺 一郎

江戸博「伊能忠敬展」併催 忠敬歩測練習の道歩測大会成績

ニュース速報・編集後記

(裏表紙) 英文目次

児玉 幸多	1
秋山ちえ子	3
	4
伊藤 栄子	9
	7
安藤由紀子	13
伊能 陽子	17
伊能 洋	19
芳賀 啓	21
永野 達代	25
渡辺 一郎	29
	32
	33

伊能忠敬についての覚書

児玉 幸多

伊能忠敬がなくなって一八〇年にあたるということで諸種の催しが行われた。私が勤めていたことのある東京都江戸東京博物館でも四月二日から六月二日まで「伊能忠敬展」が開催された。多くの人の関心を集めて、企画展としては珍しく十万人の入館者があったという。たまたま行った日にも、館内には沢山の人が忠敬の精密な地図に見入っておられた。

さて忠敬について何を知っているかというところ、昭和十年前後に私は鹿児島県の第七高等学校造士館の教授をしていた。その時の同僚に増村宏氏が居て、忠敬の薩摩藩領の測量のことなどを調べておられた。私は間もなく東京に戻ったので、その成果は知らなかった。

大戦が終わってから、女子学習院（この時は学習院女子部になっていたかもしれないが）の地理の教授であつた堀米次さんに聞いたのは、堀さんは近衛師団に暮の仲間の知人が居て、時々出かけていたが、たまたま終戦後間もなく行ったときに、古い書類やら何やらを整理していて、庭に投げ出した物の中に伊能図があつたので、それを貰ってきたということであつた。それが今、学習院大学図書館に収められている。

学習院には制作年代の違う中図八舗があるが、その全部が堀さんが貰ってきたものかどうかは知らない。その後、学習院大学にも史学科が出来たが、その研究室に都立大学教授であつた保柳睦美さんをお願いして、伊能図について説明をしに来て頂いたことがある。保柳さんは私と同郷（更埴市稲荷山）で、私より年長であつたが、よく存じ上げていたので快く来て頂いたのである。

さて江戸東京博物館で出した図録「忠敬と伊能図」は伊能忠敬研究会で編集されたもので、中の伊能図の解説はほとんど同研究会の事務局長の渡辺一郎氏の執筆である。

六月一三日、交通史研究会の例会は江戸東京博物館で行われたが、そこで同館学芸員の田中實穂さんの「伊能忠敬・測量の旅」という研究発表があった。測量出発までの準備と待遇、測量先での作業、測量日記から見た旅の様子など詳細な内容であった。

また、渡辺さんのお話により、六月一六日のNHKの「堂々日本史」を見た。忠敬の測量は幕府の中央集権制の立て直しの一環で、それに必要な全国の情報を集める目的があった、などという話があった。江戸幕府の全国的調査の一つということでもあった。

それで思い出したのが「五街道分間延絵図」のことである。これは道中奉行所の事業として寛政一二年に幕府で五街道の実地測量を行い、文化三年に完成したもので、三部作成したが、その一部は東京国立博物館に存在して、重要文化財に指定されている。これを「東京美術」で複製を作って発売中である。私はその監修をしているが、開始が伊能図と同じ寛政一二年であることも、幕府の意図として考え合わせることが出来るよう。

さて「堂々日本史」によると、忠敬の測量隊を引き受けた諸藩の準備や接待などが大変なものであったことが示されている。実際そういう受け皿がなければ、あの大事業は進行しなかったであろう。

忠敬の事業が改めて再認識される機会が出来たことは喜ぶべきことである。何十年か前と言っても終戦後のことであるが、佐原の忠敬の旧宅を二度ほど訪れたことがある。しかし、そこへ来る人は稀であった。土地の人も、ある大学の野球選手の家はここですと教えてくれる程度であった。伊能忠敬研究会などによって、忠敬の事業や、また人物像が明瞭になりつつあることは慶賀すべきことであり、その御努力に敬意を表する次第である。

(こだま こうた・学習院大学名誉教授)

とてもいい企画展でした

秋山 ちえ子

一九九八年四月二日から六月二日まで、東京・両国の「江戸東京博物館」で開催された「伊能忠敬展」で私は久しぶりに充実した感動の時間をたっぷり持つことが出来ました。

日本列島の「小図」、国内各所に残されている「伊能図」に関連するもの、イギリスの博物館が持っているものを借りてきて可能な限り集められていました。今から一八〇年も前にどうしてこのような正確な日本列島の地図が出来たかを語る測量道具の数々、測量に参加した一八八人の人々の略歴、忠敬の測量日記二八冊、それと別に日常生活日記五一冊のキチンとした文字に私は胸をどきつかせました。

学芸員の板谷敏弘さんからこの展覧会の企画準備に約三年かかったことをおききした時、「一年に一度はこういう企画展を開いていただきたい」と簡単に口にしてしまった私の思慮のなさに深く恥じ入りました。高齢者の生き方があれこれと話題になっている今、伊能忠敬が五〇歳から地図作りの勉強を始め、五六歳から七十二歳まで一六年間歩き続けて日本列島の地図を作りあげ、七四歳で亡くなったというこの生き方からは、沢山のことを教えられ、これ又、感動でした。

学校教育の社会科の中に「伊能忠敬展」見学の時間をとれたらいいなとも思いました。

こうしたことを私はTBSラジオで四一年間、土日を除いて午前十時から話し続けている「秋山ちえ子の談話室」で話しました。

岩崎書店から少年少女用に出版された『伊能忠敬』（定価 五六〇円＋消費税）は、大人にもおすすめの本であることもつけ加えました。

（あきやま ちえこ・評論家）

江戸博「伊能忠敬展」と NHK「堂々日本史」をめぐる

出席者 渡辺 一郎・安藤由紀子

伊能 陽子・佐藤 嘉尚

斉藤 仁・清水 靖夫

佐久間達夫・香取 禎良

(敬称略・発言順)

伊能図の魅力

渡辺 江戸東京博物館で開催されていました「伊能忠敬展」が、六月二一日をもって無事に終了いたしました。また、NHKテレビの「堂々日本史」では忠敬に関して二回にわたって放映されましたので、その感想なども気楽にお話ししたいと思います。

まず江戸博ですが、結果をご報告しますと、入場者数は全部で一・一、三九九名でした。これはこれまで五年間に江戸博がやった企画展では、「シーボルト展」に次ぐ数字です。「シーボルト展」は六二日間、今回は五四日ですから、実質的には同じか、こっちがちょっと勝ったぐらいでしょうか(笑)。それから、図録(伊能忠敬研究会編、株式会社アワ・プランニング刊)の販売数は九、二五九冊で、最終日前日の夕方に完売しました。ですから、最終日に行くともう買えなかったという話も耳にします。

安藤 ええ。謝る専門の係の方がいました。

渡辺 それから、私どもの主催行事であります歩測大会は、全体の参加者数は七百何十名と予想されますが、歩測調査票を出していただいた方は五〇九名でした。これをパソコンできちんと集計をしましたら、歩測をした三区間のうち歩測名人が六名、歩測達人は一六名出ました。

伊能 江戸博の最終日はすごかったですよ。あまりの混雑で展示が見えないという方がたくさんいましたし、係の方が「お子さんの手を放さないでください」と叫んでいました。

佐藤 お母さんと子供といった親子連れが大勢来ていて、二人とも目を輝かせて地図を見ているという風景が、とても印象的だったですね。

伊能 あと、ご夫婦などでもどちらかが得意になって説明をしているという場面が多かった。そういう展覧会はめずらしいと思いました。

斉藤 そうですね。普通展覧会というのは静かに黙々と見るものですが、私も最後の週の金曜日に行ったら、声高らかに説明している人がやりましたね。

佐藤 忠敬フリークが意外にたくさんいるんですね。

佐久間 そんなふうに忠敬がいろいろな人に関心を持たれているというのは、やはり実際に日本全国を測量してまわったというのが大きい





と思う。

全国各地で、どこどこのお寺へ泊まったとか、どこどここの庄屋へ泊まったとか、そこへだれが訪ねてきたとかということがあるわけですから、みなさん身近なところの当時の村の名前が地図の上にあるわけです。そうすると、これは自分の、あるいはうちの家の生まれたところだとか、ジイさんバアさんの出身地だとかといって、見て楽しむことができる。そこが忠敬と、江戸博を見に行った人との結び付きの根本だと思うんですよ。

伊能 このあいだも、平戸の松浦史料博物館の学芸員の方から、いまは使われていない地名で分らなかったのが、伊能図に出ていたので感激したというお手紙を頂いたんです。

清水 伊能図というのは全国版ですから、全国どこの人でも、立ち止まってじっと見ている。

佐久間 やはり地図というのは情報量が多いですから、文章よりもより多くのことを教えてくれるんですね。

渡辺 みなさんがあれだけ地図に関心があるというのは、嬉しい反面、正直を言っても少し驚きでもありました。

伊能 古文書を見る人も他の展示会にくらべてすごく多かったんですよ。

安藤 キャプションを、わりと具体的に書いていたのがよかったですね。もっと詳しくくてもよかったですけれどね。

反省点としまして、一箇所まちがいがあっ

たんです。本当は間五郎兵衛の書簡なのに、全然別の人の名前が書いてあったかですね。内覧会とは別に、間違いを確認するためだけの会というのを開いていれば、ああいう大きな間違いは防げたのではないかと思います。

清水 それはものすごく必要なことですね。

多面性がある忠敬像

香取 「堂々日本史」は二回の構成になっていて、一回目は伊能図に焦点をあて、二回目はシーボルトということでしたので、二つをいっしょくたにするのではなく、分けて議論する必要があるように思います。

清水 一回目に関しては、放送のあと、面白かったよということをお願いする人たちが言われまして、大方の評判は大変良かったですね。啓蒙的だったし、もう一つは意外性ですね。

伊能図の測量の裏にあんなことあったの、とみなさんおっしゃるんですが、実は私もよく知らないわけです。

渡辺 そのところは非常にだいたい問題だと思う。

番組では、書上げによって江戸幕府が情報収集していたという話になっている。しかし、それは確かなこととはいえないんです。

安藤 このあいだ世田谷伊能家文書を見直していましたら、書上げを何村分かまとめて、伊豆から江戸の天文方へ飛脚で送ったという覚書が出てきたんです。忠敬さんがついていかなかった伊豆測量だからということなのか、あるいは文化一〇年の三月に天文方が丸焼けになったために、書上げも焼けてしまったということなのかよく分からない。渡辺 忠敬宛じゃなくて、天文方へ送ったんですか。

でもね、天文方にきちんと提出していたんだとしたら、あの忠敬さんが控えをとらないはずはないんだから、何かもっと組織立って測量日記的に整理をしたものが残っているはずなんですよね。

安藤 それがまた幕府の中樞までいっていかどうかというのも、非常に問題ですよ。

渡辺 書上げを出させるといっても、出すほうは御巡見のときと同じに出すと言っているんだから、前と同じものをもらってしようがないわけで、全然意味がないですよ。

安藤 巡見使のときや、それとは別に寛政六、七年など、ふだんからたくさん出させていたわけですけど、番組では、「それまでは出させたものを点検する機会がなかったけれど、今度は伊能さんが実際に歩くんだから、前みたいないい加減なものを出せないと、だから価値が全然違うんだ」というふうになっていたんですよ。

佐久間 私は全国から書上げの資料をいろいろもらっているけれども、ところによってすごく簡単なものもあって、あれで国情を知ろうなんという意図はなかったと思うんです。

「堂々日本史」は、いままでの伊能忠敬像とは違う見方をしようとしたんだろうと思うんですが、それには、もっと資料に基づいたきちんとした根拠が必要だったろうという気がします。

佐藤 いろいろと問題は複雑ですが、伊能忠敬という人物に対する様々な解釈というのはいま始めたばかりですし、一人の人物に対していろいろな解釈ができるというのは、それだけ忠敬が大きな人物だったということだと思えます。

私などは立场上、いま静かにやって来つつある伊能忠敬ブームが、もっと本格的に、地に足がついたものになってくれればいいという考え方なものですから、とりあえずNHKがとりあげてくれたこと自

体を非常にうれしく思います。

だからいろいろな角度からいろいろな解釈を、みなさんいろいろ言うてくさいといいたい。そのほうが人物として多面性があって奥の深い人ということになりますから。例えば「四人の妻たち」という角度の話などもどんどん出てきてもらいたい。

斉藤 「四人の妻」という話は、誤解を招くことがあるんですよ。なんで四人まで持てるんですかと聞かれるわけです。

佐藤 つまり、イスラムのように一夫多妻だと思われるんですね。

佐久間 忠敬は奥さんにみんな早死にされた。ミチだって四十代でしよ。妻に四十代で亡くなられるというのは非常に不幸なことだと思いますよ。私も母が四十代に亡くなったからよく分かる。そういうことがまず根底にあって、結果的に忠敬には四人の妻がいたというのは、知っておいてほしいところですね。

いままで伊能忠敬という名前だけが知られていて、どういう人なのか分からないのが、今回「堂々日本史」にとりあげられたというのは、佐原市にとっても、伊能一族にとっても、非常に良かったと思う。

香取 佐原とか伊能家のみならず、日本のためにいいことですよ。全員 いいことです（笑い）。

伊能 たくさんの方が面白くご覧になったというのは確かみたいです。主人も学校へ行ったら、見たよ、良かったよって、先生方に言われたといっていました。ただ、事情をいろいろと知っている研究会のメンバーから見ると、ああじゃない、こうじゃないと、言いたいことはいっぱいありますよね。

いずれにしても、展覧会にしろテレビにしろ、みなさんに関心を持ってもらうのには、いいきっかけだったかなと思います。

「伊能忠敬展」に関するアンケート

(敬称略・50音順)

板谷 敏弘 (江戸東京博物館)

今回この展覧会の担当をいたしました。展示の構成や、展示資料の選択、資料の解説などについては、研究会の調査研究の成果なしではとても考えられなかったもので深く敬意を表し感謝を申し上げます。

関連事業に際しましては、大勢の方の参加を見、成功だったと思います。ひとつだけ残念だったのは、パネルディスカッションが時間切れで、十分討議できなかったことです。一般の方もおおぜいいたので、もうすこし事前打ち合わせを尽くし、的を絞ればよかったと思いました。

伊能 洋 (洋画家・伊能家)

最初に江戸博の会場に入った時に、さまざまな感慨が去来しましたが、何よりも母に見せたら、どんなに喜んだことかと思いました。

圧倒的に多かった声は「来館者がこんなに熱心に、いつまでもケースの前を動かない展覧会は見ることがない」というものでした。

また、展示が大変分かりやすく、今まで何となく持っていた知識が整理出来たという声も多く、「忠敬と伊能図」の編集が優れていたことが立証されました。

地方からは、「同規模の〈忠敬展〉を何故、大阪・名古屋・福岡でやらないのか。東京だけというのはあまりにも残念、是非実現させて欲しい」との声もありました。忠研としても一考の要有りと思います。(すぐにとのことではなく)

今後の問題は、一石を投じた後の波紋の持続ということで、打上花火に終わらせないために忠研の地道な確とした運営が望まれます。

岩城 元 (朝日新聞社・伊能忠敬事務局)

「伊能ウォーク」のコース下見で各地の市町村役場を回っているが、その多くで「伊能忠敬が最近ちょっとしたブームになっていますね」「NHKで伊能忠敬をやっていましたね」という声を聞かされる。江戸東京博物館だけで伊能忠敬展が終わるのはあまりにも惜しい。伊能ウォークに合わせてそのミニ版を各地でやればなあと思っている。

加藤 剛 (俳優)

フロアに一步踏み入れたときの印象はまるで美術館のように美しい——アーティスティックインプレッションというべきものでした。本来の目的に機能するものとしての地図は、人の夢の形をして限りなく美しく、心を魅了するのです。やはり、人は夢のために歩く生きものなのだ、という思いで会場を後にしました。

木谷 道宣 (日本歩け歩け協会専務理事)

伊能忠敬展万才!!

小さな身体に不屈の闘志、思い込んだら命ガケとつきすまれた渡辺一郎さんと伊能忠敬研究会のみなさんの熱意が江戸博について伊能忠敬を持ちこみ、十二万人の人に、そしてテレビ、新聞等で一億人の国民に「忠敬」先生をしっかりとかみつけれられたことに心から感動、感服いたしております。

—— 歩測達人・木谷道宣拝

古賀 伸雄 (劇団俳優座代表取締役)

おつかれさまでした。第一プロジェクト完了、大成功だと思っています。

佐久間 達夫（元伊能忠敬記念館館長）

伊能忠敬展によって、一枚の伊能図が自分の出生地や現住所と密接にかかわっていることや、たくさんのお宝を内蔵していることを大勢の方に認識していただけたことは、忠敬に関係した一人として喜びである。

又、伊能忠敬という名だけではなく、人間について、遺書・遺品・図録などを通して、少しでも知っていただけたら幸いです。

伊能忠敬展を開催するために裏方として努力された皆様に敬意を表します。

田中 実穂（江戸東京博物館）

「伊能忠敬という『歴史上の偉人』を、どのようにしたら肉体を伴った存在として示すことができるかな……」企画展の準備を進めながら、始終そんなことを思っていました。

伊能忠敬といえば小学校の教科書にも出てくる。きれいな地図は、日本史の教材に欠かさず載っている。けれど、この世に存在していたという実感はいまひとつ持てない。なぜ、どのように地図を作ったのか。あんな細かい地図を作った忠敬は、どういうお人柄なのか。その人間くささを表すのに、どんな資料が使えるのか。どうやらこの企画展は、忠敬に対する公開質問状&回答の場であったようです。

自筆の日記や手紙を主な手がかりとしたので、もちろん決定的なことはいえませんが、想像するに「厳しくて頑固な職人肌のおじいさん」「身内にいると少し大変」「やることをやれば認めてくれる」（日記を見て）「とにかく几帳面」などなど。現役引退後に、一七年間も地図作りをやっていたその最大の理由は、外交問題でも幕府の政策でもなく、この性格にあるとつくづく思い知らされました。でも、一八〇年もの昔の人から、「人の生きかた」について、考えさせられたのも確かです。特にこんな世の中では、本当に……。

最後になりましたが、この企画展の開催にあたり協力して下さった皆様へ、厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

野々村 邦夫（建設省国土地理院長）

約三年間に渡る伊能プロジェクトは、期待以上の成功を納めて序盤を終えたと思います。

展覧会その他多くの催しに参画させていただいた者の一人として、渡辺事務局長を始め伊能忠敬研究会の皆様の大な熱意と努力に対し、心から敬意と感謝の意を表します。

これまでの成功の原因を冷静に分析してみますと、やはり何と言っても、伊能が時代に歓迎されたということが根本にあるのではないかと思います。それに加え、埋もれていた伊能図の会期直前及び会期中の発見、主催者である朝日新聞に止まらないマスコミの高い関心、素人の思いつきのまぐれ当たり、その他多くの幸運に恵まれたことが大きいと思います。とにかくこれまでのところ、伊能プロジェクトはついていきます。

物事がうまくいくかどうかは、運次第だと思っています。このプロジェクトは、関係者の熱意と努力によってこれまでのところうまくいったと言うよりも、関係者の熱意と努力が大きかったため、幸運が逃げ難かったと言う方が適切かと思います。今後ともこのツキを逃さないためには、熱意と努力を持続させるとともに、これを包囲する人の輪を一層大きく、強固にすることが戦略的に重要であると思います。

渡辺 一郎（伊能忠敬研究会事務局長）

伊能図中心の「忠敬展」に少し心配していたが、さすが本物の迫力で大変な好評を博しおどろいている。

「忠敬展」がらみで伊能忠敬の名前がマスコミを通じて広く知られたことを喜んでいる。

愛媛県温泉郡中島町の町史資料より

伊藤 栄子

愛媛県の中島町は、松山市の北西の方向、瀬戸内海上に浮かぶ七つの島と二の無人島(忽那諸島)を合わせて、現在は瀬戸内海国立公園に指定されている。江戸時代には一村一島の島々もあったが、明治以降は町村制実施で統合され、さらに昭和に入って、村は町制により上記の島々を編入して、今の中島町となっている。

文化五年(一八〇八)八月第六次測量の途次、伊能忠敬一行は中島地方にやってきた。稲生秀蔵ら弟子三名、幕府の下役四名その他右左、竿取、小者など、総勢十六名であった。八月一日には三津浜から興居島へ渡り、それより二神をはじめ各島々を調査した。しかし一行の測量が、すべてすんなり運んだわけではなかった。

当時このあたりの島々は、大洲藩領と松山藩領が入りくんでおり、二子島については、松山藩領二神村と大洲藩領怒和村とが、所属をめぐり争っていた。呼称の上でも十一村を占める主島の中島を、松山藩領は風早島と呼び、大洲藩領は忽那島と呼んでいた。紛争のもと古くからあった。その上安永九年(一七八〇)以後、大洲藩領のうち粟井、小浜と大浦の半分が幕府領となり、関係はいっそう複雑になっていた。

八月七日朝、測量隊一行は津和地島を出立し、三手に分かれて測量することになり、そのうちの一手が怒和村へ渡った。

資料 その一

怒和村御改

赤印 坂部貞兵衛殿

柴山伝左衛門殿

附添 三井金助

三好十次兵衛

栗井村 幸右衛門

其外庄屋中

青印 青木勝次郎殿

稲生周蔵殿

附添 東 寛治

浅井才兵衛

上怒和村 伝右衛門

小浜村 千之允

其外庄屋中

怒和村之内二子島(*)ハ、先年より松山御領二神と論所ニ相成、怒和ニハ此方之島と申、又二神ニハ此方之島ニ而、則先年驚が果を懸候節も二神より番人を附置候而、松山へ差出し候と申、亦怒和ニハ二神より其節右之沙汰有之故、此方ニハ驚人用無之間、勝手次第二番をいたし、松山より御頼ニ候ハ、捕而差出し可被申と返答致し置候由を申立、双方より申募候得とも、いつれニも是と慥ニ証拠も無之、依之此度も何れと訳立事なく、怒和村図へも加藤遠江守領分怒和村之内二子島、松山領二神と論所ト相記し(**下改之節、大洲、松山両方ニ而測量いたし、此度の図面ニ大洲ニハ、松山の縄張り大之島を書載せ、松山ニハ大洲之縄張小之島を書載せ、公儀へ被指出成、御双方絵図面取替)指出候訳ニ候へハ、何卒此度御測量なく御済せ被下度段、宇和島御領三机浦において伊能、坂部之御両所へ平井、東兩人より申述候処御答ニ、御双方御大名之御捌ニさへ訳立不申島、我々天文方之身分にて是非を論する事及びも無之候 よって此島二ツ井との島(殿島)

其外前小しま、いもこ島（芋子島）之類都而小島之分一切無渡海、無測量遠測ニ可致間、其旨心得候様ニ被仰聞、其後御城下御泊之節、貞兵衛殿へ島方絵図面指出候時分、又々寛治より為念御遠測ニ而御済せ被下候様申置、依之無相違御遠測ニ相成也（*この二子島は、大きい方の島を「下二子島」、小さい方の島を「上二子島」と呼んでいる。

**の箇所は、小文字で書き入れてある）

測量隊は八月七日に津和地島を出立し、その日のうちに怒和島へ入った。右に示した資料によると、大洲藩領怒和村の内の二子島は、先年から松山領の二神と領地争いになっていた。先頃、鷲が巣をかけたとき、松山領二神から番人を付けておき、捕えて松山へ差し出した。その時も問題はなかったから、自分たちの島であると主張したが、一方怒和村の方は、いやこちらは別に驚の必要がなかったから、捕えなかったまでのことで、松山からの御頼みであれば、捕えて差し出す約束をしていた、と申し立てて、双方とも譲らなかった。しかしこの時はどちらの所領ともはっきりしないので、怒和村図へは、加藤遠江守領分怒和村の内二子島、そして松山領二神村の分と双方で、縄張りの島を取り替えて記していた。したがって此度は御測量ではなく、遠測で御済ませ願いたいと、附添の東 寛治から申し出があり、その通り島には入らず、遠測ということになった。

（冒頭にある論所^{ロンス}というのは、江戸時代に山論や境界争いの対象になった土地のことである。広く論所（論処）といっても、山論^{ヤマロン}は山出入ともいって、山林の帰属と利用権をめぐる争いであり、この中には境目の争いも含まれていたという。）

伊能測量隊が全国を測量したとき、各所で山論の問題に遭遇したことが、資料からも散見できる。全国的にも数多い問題であったが、行く先々でこれに関っていたのでは、測量は進まない。忠敬先生はさらにと上手にこの問題を避けて通られたものと思う。双方の御大名の御捌きでさえ決着のつかないものを、われわれ天文方の身分で、どうして口を出すことができようかと答えていた。まことに名答であった。

では実際には、双方の大名が身をのりだして争ったのであろうか。人も住んでいない小さな島のことで問題が大きくなれば、藩と藩の争いになる。これが幕府の耳にでも入れば、面倒なことになるのは、目にみえていたから、両藩とも表立って争ったとは考えられない。そこで双方縄張りの島を取替えて書き載せ、公儀へ差し出すという案を、打ち出したのである。一応公儀への届けは終り、一件は落着いたかにみえたが、住民の気持ちは収まらなかったであろう。村民もその事は充分承知のうえで、一縷の望みをもって、忠敬先生に相談をもちかけたのではないだろうか。そうであるのなら、何とも迷惑な話である。

今回は、忠敬先生は紛争を避けてうまく事を治められていたが、いつもこの様に対処されたわけではなかった。忽那諸島の測量を終えて再度四国に上陸し、桑村郡壬生川村^{ニウツカガ}の測量をおこなったときは、たまたま同村の新田と高田村新田で境川付近の境界紛争中であり、大庄屋が無境界として測量をしてほしいと忠敬に願っていたが、これは拒否されたということである。そのため測量中にかぎり、川の中に杭木を立てて、今後の村境の証拠としない事を条件に、測量がおこなわれていた。

忽那諸島は海にかこまれた島々であり、そのために、一部では遠測で済ませていた。しかし陸地の中での境界争いは、当事者の間の意識がまことに熾烈であり、根が深いことを感じさせる。

瀬戸内海は魚類の宝庫といわれる。このあたりの島々は無人であっても、漁場の基地としての価値は充分にあった。ことに二神島の付近は、江戸初期から鰯漁の適地であり、江戸時代中期以降になると、干鰯カシカの需要はのび、村人の収入源になっていた。干鰯は乾燥肥料として即効性もあり、下肥に比して運搬も便利で、農業生産を非常に高め



輯製二十万分之一図(部分)

たから、人々は鰯を求めて集ってきた。他領の村が二神村へ入漁料を払ってまでも、この辺りで鰯漁をしたと史実にある。こうした経済的事情もからみ合って、争いの原因は一樣ではなかった。ともかくも測量隊は論所をやりわり避けて、二子島、殿島、前小島などの小島はすべて、遠測ですませた。

現在、この島々を含めて作成した地図は(忽那島測量図)、中島町役場が所蔵保管しているという。伊能忠敬のこの測量図は、今みても出色の出来ばえであったといわれる。

資料 その二

無須喜村御改

伊能勘解由殿

附添

東 寛治

青印

青木勝次郎殿

浅井才兵衛

植田文助殿

其外庄屋中

赤印

坂部貞兵衛殿

附添

三井金助

柴山伝左衛門殿

三好十次兵衛

其外庄屋中

無須喜村庄屋村上市郎宅

伊能初御宿

同村 (記入なし)

坂部初御宿

青木勝次郎殿、瀬元よりとの島(殿島)御見込之節、寛治より申述候にハ、只今御見込之との島と申ハ、兼而申上置候通元禄年中従 公義伊予国絵図面、今治、松山、大洲、宇和島之四家江被仰付摸写仕立被指出候画面ニモ、大洲領無須喜村之内との島と御座候

其後寛文年中ニも島々図面被指上候事御座候 其節之控ニも同様之

義二御座候 然所当春下改之砌より、松山領長師村入相之由申立候へとも、とのしまに限り脇村掛り合無御座、無須喜島持ニ相違無御座段申述候処、其訳合御帳へ被相記、其上ニ而被仰候へ、松山方ニもあの方の島と申、則絵図杯も差出候との御答へなり

右之通之訳合ゆえ、公義之御絵図面ニハ何れの持分と御書入有之候哉相知不申候

右の資料は、怒和村御改めのあと、伊能隊が無須喜村（明治以後は睦月村）へ入り測量したときのものである。前文と同じく、村御改めのあとがきに書き添えられた一文である。

八月十日、この日青木勝次郎が殿島を見分したとき、またもや東寛治から説明があった。それによると、この殿島という島は、かねて申し上げている通り、公儀の伊予国絵図面として差し出したときも、大洲領無須喜村殿島と書いてある。その後寛文年中の島々絵図面も、同様にして差し出していた。ところがこの春の下改めのときより、殿島は松山領長師村の入合の島である（入合とは二人以上の旗本、大名による分割支配をいう）と申し上げ、その訳を記してある。

このように松山の方も自分の領分として、絵図面を差し出したとの答えであった。そのようなわけで、公儀の御絵図面には、殿島がどちらの持分と書かれていたのか、全くわからないと記されているが、これもおかしい話である。一体この絵図面には、どこの領分と書き込まれていたのだろうか。怒和村の御改めのように、両方の領主の名が書かれていたのだろうか。もちろん測量隊や村方が決められることではないが、興味あるところである。

この無須喜島は一島で一村、忽那諸島の一島で、江戸時代は大洲藩

領であった。ここでは干鰯の生産はもちろんのこと、その他の俵物請負高も多く割り当てられていたという（俵物とは煎海鼠、干鰯、鰯、鰯の三品をいう）。これらは現在でも、高級中華料理には欠かせない材料である。俵物は元禄十年（一六九七）頃から、清国向けの重要輸出品であった。この集荷には長崎の俵物元役所があたり、伊予の各浦、無須喜村はじめ忽那諸島の村々にも、請負高が割り当てられた。ただ割り当てが過大であり、そのうえ買い入れ価格が安かったため、各村ともその対策に苦慮していた。

こうした状況のもとでの測量隊の入境であった。天文方の接待は実に大変で、海岸の道造り、宿の修理や昼食のための小屋がけなどがあったし、また中島の畑里村では、海岸小廻り用や轆を立てたり、縄運び、小送り等の人夫役を、のべ四五三人も出していた。その他に賄料、宿料などがあり、諸入費は風早郡で出すことになっていったが、郡で不足した分が夫々の村に割り当てられ、高割りで村民の負担となったことが、資料に詳しく記されている。瀬戸内の小さな島々の歴史からも、伊能測量の一端を担ったことが、町史の資料から伝わってくる。

今回の資料と第十号掲載の『地域資料』は本会々員の菅 哲彦氏に御提供いただきました。厚く御礼申し上げます。

参考資料

『中島町々誌』

『愛媛県の地名』平凡社

『愛媛県史』（近世）上下

『愛媛県の散歩道』山川出版

『肥料の来た道帰る道』高橋英一著、研成社

『國史大辞典』吉川弘文館

伊能家文書紹介九 その一

桑原隆朝

安藤 由紀子

なんでも鑑定団

さていよいよ、伊能家にはまったくその史料がないのに、桑原隆朝というキー・パースンのことを書かなくては、と思っていた矢先、昨年九月放送の東京テレビ「なんでも鑑定団」で、桑原という方が、蔵の中から見付かった『解体新書』を持って出演されたという話を聞いた。本物で五冊全巻揃い、御先祖の書き込みがあり、かなりの値があったという。

大槻玄沢は仙台藩医に取り立てられて江戸詰めになり、「塀の外の藩医」として杉田玄白宅に出入りし、寛政二年から『解体新書』の改訂を始めていた。ノブさんの兄弟、三代目桑原隆朝(如則)は大槻玄沢と極めて親しく、同じ仙台藩医。桑原如則が『解体新書』を持っていたことはほぼ確実である。とすると、この方は桑原隆朝の子孫かもしれない。さっそくテレビ東京に電話して制作会社を教えてもらい連絡してみた。これがなんと世にも忙しい方々で、担当者がなかなかつかまらない。あるいは簡単なことでは相手の住所を教えたくないためかも知れないと思い、雑誌『伊能忠敬研究』にそえて嘆願書?を書いて送った。効果てきめん、桑原さんの電話番号が分かった。

桑原夫人のお話によれば、番組に申し込まれた御主人はその後急逝され、当日は、御息が出演されたとか。まだ御主人の遺品に手をつける余裕もないほど取り込み中のご様子であった。御主人は時々仙台

に行かれたが、特別なお話はなさらなかった由、私はすっかり気落ちしてしまった。そのうち整理がついて何か分かったら知らせさせていただく約束なのだが、あまり期待できないかも知れない。

初代桑原隆朝(如章)―ノブさんの祖父

初代桑原隆朝は、不思議な運命の人である。例の真葛さんの『むかしばなし』によれば、「桑原のじい様は何人の胤^{たね}なるやしれず」。昔、一人の男が本曾路を江戸に向かって、六つばかりの男の子を連れて旅していたが、風邪で五、六日の内に死んでしまった。村人は仕方なく亡骸を近くに葬り、子供は寺に預けた。二年程たって、仙台藩医橋隆庵(四百石、伊達宗村侍医)がその寺に泊り、給仕に出たその子が気に入って『給わり候え』というわけで仙台に連れて帰った。読書が大好きで風呂桶に隠れて書を読むほどだったので、医学を学ばせたとく、大変な上達ぶりであった。これが後の如章(ノブさんの祖父)である。宗村公から橘に門弟の医師を一人差し出すようにとの話があった時、如章が推薦されたので、彼は橘家を終生実家として遇した。

『仙台人名大辞書』にも「生国詳ならず」とあるが、『伊達世臣家譜』によれば、桑原五郎太夫親福という人が武蔵国忍城主阿部家に仕えていて、のち浪人、その子親斯をへて、その子如章が医を学んで伊達家に仕え、宗村の代に奉養となった、とあるから、浪人の子である親斯さんが、真葛さんの話に出てくる行き倒れの男にちがいない。この初代如章から四代までの諱^{イミナ}を桑原隆朝という(四百石)。

如章は博学で、五百巻の抄書を残し、新井白石と佐久間洞庵の往復書簡、『新佐手簡』を編集した。夫人ヤヨ子は『宇津保物語』の研究者であった。真葛さんによれば、桑原家は行儀のやかましい家で、と

くに「ばば様」はかんしゃく持ちで嫌いな事が多く、笑い狂うこと、仇名をつけること、など面白そうな事は大嫌い、『私子供の時分遊びに行きても、そうはせぬ、こうもせぬものと仰せられ、さてさて気の詰まるばば様とおぼえたりし』と回想している。系図が示す通り、夫妻には一女一男があり、姉が工藤平助の妻で、真葛さんの母である。

二代目桑原隆朝ーノブさんの父

史料一 『伊達世臣家譜』九十七

桑原隆朝純曾為侍医、寛政五年六月會

桂山公病命治療、嘗以多病許乘輿於

邸内、六年正月為奉養免入直且命 信

證夫人診脈、七年十二月療 公病、有驗賞

賜羽織一領及白銀二十枚、八年六月從 公

駕至仙台、九年正月免奉養且命 紹山

公 觀心夫人及諸公子診脈

(八代伊達齊村)

(齊村夫人鷹司氏)

(九代伊達周宗)

(七代重村夫人近衛氏)

ノブさんの父は、八代齊村・同夫人、九代周宗、七代重村夫人はか諸公子を診察し御褒美をもらったこと、病気がちなので宿直を免じられ、上屋敷内で輿に乗ってよいとされていたことなど、藩から厚遇を受けていたことが分かる。四人も桑原隆朝がいて紛らわしいので、以後この名は、ノブさんの父のみに使うことにする。

桑原隆朝に関する史料はこの七行だけである。隆朝もノブさんも忠敬宛に手紙を書いたことは確実なのに、一通も残されていない。不思議なことだ。あとは真葛さんの『むかしばなし』に頼るしかない。

桑原家と工藤家

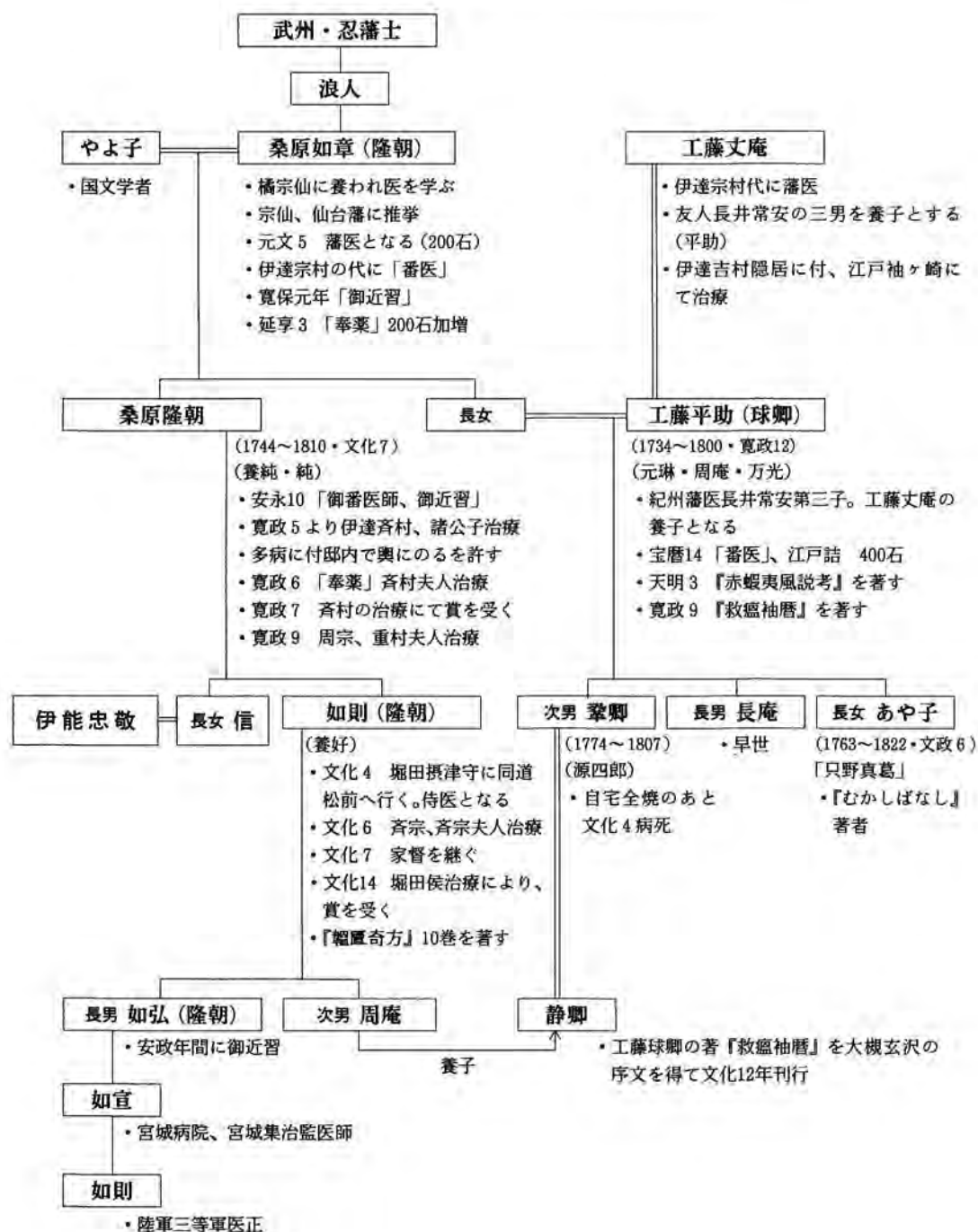
次頁の系図で明らかな通り、真葛さんの実家工藤家は類焼で丸焼けになり、間もなくただ一人残った跡継ぎの源四郎も文化四年に病死、工藤家はとどめを刺された。母方から隆朝の孫周庵が入って跡を継ぎ工藤静卿と名乗った。盲目の人だったと書かれている。

伊達藩士只野家に嫁しても子のない真葛さんは気性の激しい人であったが、実家の没落を齒しりしながら見守ることしか出来なかった。如則(隆朝の長男)は、煙の中から助け出した諸道具家財を、家内の人の見ている前で道具屋に売払い、「金五拾両となしたるは無惨のことなり。(中略)書物は養子方へ譲りにとて渡したりしをも引き出して売代なせしとは聞きしが、(中略)さる人のこの地の本屋にて、父の判のすわりし本を見当りしとて、哀れはかなき代や、あれ程名高き人の持たれし書の、いく程もなく散りゆくは、いかなる人か後に立ちしと歎き語りしことありし。他人の目にだにも歎かわしくみゆるを、正しき子の身として、いかで怨みをふくまざらめや」

彼女の悲しみは同情に値するが、事実は少し違うようだ。『仙台市史』によれば、工藤平助には『救瘟袖曆』という医書(初編・二編)があり、四〇年にわたる彼の治療の蓄積の成果を記して、家塾の晩功堂に備え、子弟に授けていた。後にこの本をノブさんの兄弟桑原如則が重校し、大槻玄沢の序文を文化十二年に得て、養子に入った如則の実子工藤静卿が刊行した。内容は蘭方を加味した漢方だったらしい。林子平は長崎で筆写した『医薬方剂』(蘭方)を工藤平助に贈り、これが利用されているからである。

『市史』は、「家塾の秘書を公刊した桑原如則と工藤静卿の学的良心は、嘆賞すべきものである。」と書いている。

伊能・桑原・工藤家 家系図 (関係者のみ)



桑原隆朝のさめた目録

工藤平助と桑原隆朝は義兄弟になるが、これほど正反對の氣質の二人も珍しいだろう。

史料 二

『むかしばなし』

只野真葛著

東洋文庫

(前略) 父様と叔父様は、各々得手の分野はちがっておられました。が、凡人でない心の持ち主でもありました。こんな例があります。妹のおテルが言うには、叔父様の話を聞く度に「心もしめり引入るようにて」次のような話をなさったそうです。

「この世の中の果てはどうなるものか。私が入りしなない大名はない程だが、どこの若殿を見ても、これが成人したらどんな馬鹿になるかと思う子ばかり。大納言様(將軍世継ぎ)はどんな人かと旗衆に聞いてみれば、御幼少のときは、豆蟹をつぶすのが好きで、毎日毎日大納言様御用とて、沢山取ってきておそばに撒き散らし御相手の子と一つずつ押し潰すこと、それがすぎて九つ十ぐらいの時から鶏がお好きでいくらかでも上がる。それも棒を持って追回して追いつめてぶち殺すのが好き。お慰みにて、お縁の下にはいくらかも腰抜けになった鶏がひこひこしてかかんでいるということだ。そんな不仁の人が公方様になられたら、どんな世になるか分からぬ」と。

父様は死んでもそんな気のままふさいだ話などはされず、お話をきけば心もののびのびとなったものです。

「蝦夷地を開けば、おのずから仙台は真ん中の国になるから、のちは栄えた国になるだろう。日本の都は暑い所から寒い所へ移ってきた。はじめは筑紫より大和・山城と移り後鎌倉・江戸へ栄え移り、

この後はさしずめ仙台だろう。これは疑いないことだ。世の中というものは行き詰まったからといって、もの極まればどうにか工夫のつくものだ。世の滅するということはありえない。だから世の末ということもありえない(中略)」と話されました。お心の持ちようは、空の彼方へ晴れ晴れとぬけて行くようでありました。(後略)

工藤平助の『赤蝦夷風説考』は、天明三年(一七八三年)に著された。ロシアの東方進出の歴史を述べ、その対策として蝦夷地の開発と、ロシアとの交易を主張し、老中田沼意次の受け入れる所となった。短い間だったが、工藤は時代のさきがけであった。

樂觀的な工藤平助は田沼時代のバブルの花形であり、その没落までの破滅的な生きっぷりは見事であるが、桑原隆朝の言もまことに正論であり、寛政期を代表する「さめた合理主義者」とでも言えようか。

面白い人ではないが、さめた合理主義者として、桑原隆朝と伊能忠敬は、気が合ったのではなからうか。

(この項つづく)

参考文献

只野真葛『むかしばなし』東洋文庫 平凡社

菊田定郷編『仙台人名大辞書』

『伊達世臣家譜』巻之十七

仙台市史編纂委員会編『仙台市史』

辻達也編『日本の近世』第十巻 近代への胎動 中央公論社

※伊達家関係の史料については、仙台市博物館の荒井聡氏に御教示をいただきました。

伊能家文書紹介九 その二

苗代川

伊能 陽子

九州の測量は、二度にわたって行われた上、一七年間の測量中後期であるためか、手元の資料も多い。今まで「つく嶋」(熊本)「平戸」(長崎)を取り上げてみたが、今回は鹿児島である。と言っても、薩摩の測量については、屋久島・種子ヶ島測量を含めて、大きなテーマであり、とても私の手に負えるものではない。次の機会、あるいはどなたかに譲るとして、何年も前から気にかかっていたこの文書を取り上げてみた。

史料 一

A 一五二

(世田谷伊能家文書)

薩摩国日置郡伊集院

之内 苗代川江召置候

朝鮮人之儀者 当

豊後守十一代之先祖兵庫頭

義弘事 文禄年間

朝鮮国江致在陳 慶長

三年 帰国之節 朝鮮人

多人数 召捕つれ帰 同

八年より 右 苗代川江

召置候処 当時ニ至候而者

子孫段々相栄罷居

申候 勿論 他之姓を不雑

他所江 嫁候儀茂 不仕

血脈相続之者 御座候

左候而 最初 捕来候

者之内 焼物細工仕者

有之 子孫代々 致伝来

右 細工越 職業致来申候

二月

松元十郎兵衛

『薩摩国日置郡伊集院の苗代川へ住まわせている朝鮮人は、当主豊後守の十一代の先祖、兵庫頭義弘が文禄年間、朝鮮国へ出兵し、慶長三年に帰国の時、多くの朝鮮人を召し捕り連れ帰りまして、慶長八年から右の苗代川へ住まわせましたところ、現在では子孫が段々に栄えております。勿論、他の姓を交えたり、他所へ嫁がせたりせず、血が続いております。』

さて、初めに捕らえられた者の中に、焼き物細工をする者がおりました。子孫代々伝えてまいりまして、焼き物細工を仕事にしております。
松元十郎兵衛』

例によって、測量に先立ち、薩摩藩の担当者である松元十郎兵衛が参考資料として、測量隊に提出した書き付けである。事実を、ただ淡々と述べているように思えるのだが、その自然さが、なぜか不思議な気がした。

七年前、私は伊万里・大川内山の鍋島藩公園を訪れた。三三間あつ

たという大きな登り窯の跡を見た後、「陶工無縁墓」の前に立った時のショックは強かった。墓地への立札にはこう書かれてあった。

「文禄・慶長の役以後多くの朝鮮陶工たちが日本へ連れて来られ、日本の諸大名たちは競って窯業に力をいれました。佐賀鍋島藩も基幹産業として特に窯業を奨励し、多くの朝鮮陶工を作陶にあたらせました。この無縁墓は、この地で一生をかけた陶工達の寄せ墓で、八八〇柱余に及ぶ無縁陶工たちの墓がピラミッド型に積み上げられています。幾百里離れた故国に再び戻ることなく息たえた陶工達の郷愁の念が今にも聞こえてきそうです。」

鍋島焼の秘法がもれることを恐れ、他国人の侵入を監視防止した所である、と表示された関所跡で聞いた説明は、何とも重く心に沈んだ。

私が以前から関心をもっていた作家村田喜代子に、渡来陶工たちを主人公にした「龍秘御天歌」という作品がある。その中に次のような一節を見つけた。

「薩摩へいっておればよかったに！」

そうなのか。渡来後に住み着いた土地によって、陶工たちの運命は大きく分かれたのだ。切支丹狩りも檀家制もとらなかった薩摩藩は、苗代川に陶工たちを住ませ、朝鮮の言葉や、文化を守らせたといい。九州各地に散らばった陶工たちは、それぞれ特色ある焼き物文化を作り上げ、また四百年の歳月は、その子孫たちの生きざまも、変えて行ったのだ。

「慶長三年冬 遙かに風濤を越え 我等が開祖 この地に上陸す」
東シナ海に面した鹿児島県串木野市内に建つ石碑の文は、薩摩焼宗家十四代、沈壽官さんの筆による◇秀吉が朝鮮に出兵した慶長

の役で、島津義弘に連れてこられた李朝の陶工たちは、まずこの地に着く。やがて苦労して苗代川（現在の東市来町美山）に定住窯を開いた。◇「故郷忘じがたく候」とは、陶工たちの運命を描いた司馬遼太郎さんの小説の題名として知られる。藩に厚遇されて、薩摩焼を創始したが、望郷の念はいかばかりだったか。今年、開祖上陸からちょうど四百年になる。…読売新聞・編集手帳より

第七次測量は、文化六年八月江戸を出立、小倉城下で新年を迎え、ここから九州の測量が始まったから、薩摩の測量は文化七年、一八〇一年である。とすると苗代川には、もうすでに、二百年の歴史が刻まれた頃であったのか。

島津重豪（当時の藩主、齊興の祖父）は蘭学の影響をうけて、語学、医学、天文学などに深い関心を持つ、個性豊かな殿様であったが、苗代川を訪れたこともあったという。

忠敬率いる本隊は別のコースをとっており、この地を測量したのは坂部隊であった。

測量日記より（文化七年）

八月二十二日 湊村、湊浦、出立。同所測所より始め、大里村、湯田村伊佐田村、右側にて地先ばかり。長里村枝市来を過ぎ、寺脇村内苗代川、此所朝鮮人子孫住居、迄測る。止宿李欣磧。苗代川迄二里二十四町三十三間。

なお薩摩関係の史料として、島津一門、一族、大身分の氏名を書き上げたもの、更にそれぞれの知行高を記したもの、実際の測量に関するもの、その他測量差添役などの書状、あわせて一二点ほどが手元にある。「薩摩」にひかれて、解説に挑戦することになるであろうか。

芳名録のこと

伊能 洋

伊能の家に遺されたものの中に、五冊の古びた「芳名録」がある。

これは、佐原の忠敬旧宅を見学に訪れた方の中から、特に揮毫をお願いしたもので、古くは大正六年から昭和三年までの政治家、官吏、学者、芸術家、そして陸海軍将官など幅広い人名が並んでいて、なかなか興味深い。

当時、忠敬旧宅は史跡に指定されたものの、保護、保存費などは一銭もつかず、遺品(地図・測量器具など)はまったくプライベートなものだった。

私の祖母、忠敬から五代目に当たる孝は、毎日のように見学者が見えると、書斎の廊下に中図、大図を懸け、測量器具を並べて懇切丁寧に解説することを、八八歳で亡くなるまで、実に七〇年に及んで自らの天職としていた。

戦時中、東京から疎開して佐原の国民学校(小学校)に通っていた私も、祖母を手伝って遺品の出し入れをしたり、今ではとてもないことだが、格好の遊び道具とばかり、量程車にまたがって廊下を走らせたりしていた。

遺品が散逸を免れ、まとまって現在の記念館に収まることが出来たのは、この祖母の功績によることが大きい。

今後、「芳名録より」と題するコーナーを設け、折にふれてそのエピソードなどを交え、ユニークな揮毫をご紹介していく予定である。

芳名録より

大正十三年五月十日

先生門下

谷東平以燕 更原

谷文八郎

※「伊能忠敬研究・第九号」に紹介した箱田良助(榎

本武揚の父)の誓約書に、本人・同人親に続いて親類として署名捺印している人が「谷東平」である。号は以燕、数学者。地元測量の際は、忠敬に従い測量技術を学んだという。彼の忠敬宛書簡も保存されている。

谷文八郎さんのことはわからないが、曾祖父、谷東平さんとのご縁で、佐原まで訪ねておいでになったのであろうか。大正十三年は関東大震災の翌年であり、東京帝国大学図書館に保管されていた伊能図もすでに焼失していた。

(伊能陽子) 追記

研究会会員の菅波寛さんから、藤井貞雄さんがお書きになった「谷東平に関する諸記録」(山陽和算研究会会誌より抜刷)を送っていただいた。谷氏の家系図も含まれており、日本学士院蔵「和算図書目録」の中の谷東平著作を寄贈されたのが文八郎氏とあった。

哲人知機
 誠之於思
 志士勵行
 守之於為

大正戊午十月

看淵書

※ 洪沢栄一（一八四〇—一九三二）

清洲と号す。大正戊午は七年（一九一八）。

銀行のほか、製紙、紡績、保険、運輸、鉄道など多くの企業設立に関与、財界の大御所として活躍。実業界引退後は社会事業と教育に尽力。（広辞苑）



（大正十四年十月五日作）

※ 弘田龍太郎（一八九二—一九五二）作曲家

オペラ、歌曲、童謡まで幅広い作曲集の著書多数。「雀の学校」

「叱られて」「浜千鳥」「小諸なる古城のほとり」などが知られている。

長女の藤田妙子さんは現在ゆかり文化幼稚園園長（世田谷）。お訪ねして、弘田氏自筆であると確認して頂いた。佐原旧宅での感動を即興で書かれた譜面である。

「緯度」と「経度」の探求

——ガイアからコスモスへ・続

芳賀 啓

マリリン・サイズという現代アメリカの女性作家に、小品集 *The Island of the Map Maker's Wife* 『地図師の妻の島』(未訳)がある。タイトルとなった短編は世界と男を経巡った警句、ボストン港近くに小さな古地図の店を開いた女主人公が、アムステルダムに求めるものを買い付けに行く話で、人体を地図に見立てたエロチシズム溢れる結末が圧巻である。

洋の東西を問わず作成された、「人体地誌図」や「愛の地図」といったおよそ反教育的な遺物は、ある種の人々にとっては頗るつきの掘出しものなのだが、ここで言いたいのは別のことがらである。

くたびれたジャケットを着た退役軍人や歴史家が主流を占めるこの業界で、「非科学的」で「不精確」で、「インテリア・デコレーションにしかない」といった誇りをうけつつも、女主人公は三〇〇年ほど前のオランダの壁掛地図に情熱をそそぐ、という設定自体が興味深いのである。この業界の性もまた洋の東西を問わないのか、と感慨させられるからである。

「ラファエロ前派」(P. R. B.)というのが絵画の世界で成立するなら、地図の世界で「カッシニ前派」(P. C. B.)や「伊能前派」(P. I. B.)というのがあるのもいいのではないか。業績への野心や、学術・政治といった権威への一途な従属が影をひそめ、伝奇と経験則が混交し、曖昧な線と夢見る領域の浮遊する図群は、人

間が世界や自然に対して比較的謙虚であった時代の証書だからである。

「科学的地図」や「精確な地図」の指標のひとつは、緯度と経度の記載ということになるだろう。以下その周辺を穿鑿するのは、数字に駆逐された夢見る領域の埋葬地に一文を供したいためである。

*

*

伊能忠敬の遺した業績には「伊能図」や「測量日記」のほかに、『大日本沿海実測録』(全一四巻)『北極高度測量記』『恒星表』『国郡昼夜刻』といった記録類がある。観測結果を地名と数字などで示したものであるため一般の関心も惹かず、とくに言及・研究されることなく歴史に埋もれている。しかし世界的な学術史の観点からみれば、これらは「図」以上に貴重な「実績」なのである。

latitude を「緯度」という漢字語に対応させたのは、topography (地誌図) を「地形図」とした以上に曲訳だった(ただし前者は日中共通ターム、後者は純日本語である)。

今日、多少とも写真に関心がある向きにとっては、「ラチチュード」とは露出寛容度つまり露光の幅を指すことは常識である。派生語の latitudinous が、思想心情の上で「偏狭でない、幅のある」という形容詞であることが示すように、語幹のラテン語 *latus* は *broad* つまり幅広ということであり、latitude も元来は「幅」や「範囲」や「領域」という意味しかなかったのである。その「幅広さ」が、何故「緯度」を意味することになったのか。

漢字初形初義研究の金字塔である、白川静の『字統』によれば、

「緯」の旁「章」は、□（囲郭すなわち城邑を表す）の上に左行する足型ㄣ、下に右行する足型ㄣを配した会意文字で、左右に上から下までめぐる意であるという。「条坊制」という言葉を思い浮かべるまでもなく、東アジア古代都市権力に特有の南北グリッドパターン道路の「条」すなわち東西路を、郭壁の北端から南端まですばやくパトロールする軍事行動を彷彿とさせる説でもある（この場合、現在の「横書き」とは逆に、右から左で始まる「牛耕式」であることに注意されたい）。

この章に糸偏が付されてつまりは織物の横糸となった。「経」の正字「經」の旁が織機に縦糸を張った形であることとを思い併せると、縦糸がまず張られて、その間を杼が左右に走り横糸が通される織物の様が思い描かれ、「経緯」が「緯経」でない理由も判然とするのである。だから「経緯」とは「経緯の織りなす綾錦」というように、まずもって「縦糸と横糸」という全く二次元的構造を指表する用語なのである。ここを基盤にして「南北と東西、経線と緯線」の意が付帯し、さらには「ものごとのいきさつ、経緯」や「縦横に通暁して秩序だての基幹となるべきもの」といった語義の展開にも至ることとなる。

実は「Latitude」（幅）と「緯」（横糸）の間に（そして「Longitude」と「経」の間にも）は重大な断絶がある。それは「世界観」の次元落差そのものである。

Longitudeとはlengthつまり長さである。一体何の長さなのか。

プトレマイオス（AD二世紀）はその『Geographike Hyphegesis』地理学』（全八巻）第六章で、テュロスのマリノスの業績にふれ、それを訂正しつつ次のように述べている。

「ところで、この地球表面の東西方向の広がり（経度）、南北方向の広がり（緯度）と呼ぶことは妥当であろう。なぜなら、地球上の運動の中、東西方向あるいは南北方向の広がりに対応するものを我々は同じ用語で呼んでいるし、一般に、広がりの中でより大きいほうを長さ（長さ）と名づけており、人間の住む世界の場合、東西の広がり（南北の広がり）より遥かに大きいことは、万人の斉しく認めるところだからである。」（中務哲郎訳）

引用文の前半からは、地上の位置を表す緯度・経度の座標系はプトレマイオス以前から用いられていたこと、そしてそれは地球上の位置を表す座標系と対応したものであったことが判然とする。問題は後半部分である。「人間の住む世界」とは原文では「オイクメーネ（エクメネ）」であり、「既知の世界」を指していた。そうしてこれを図形で示せば、地球面の緯度帯に並行した横長の矩形となるのである。「幅」とは「帯」でもあり、ある範囲の気候帯（クリマータ）を意味することにもなる。およそ文明の民の住むところ、暑すぎもせず、寒すぎもしない、比較的中緯度の領域だというのは古典古代の常識でもあった。そうして経度とは「既知の世界の横の広がり」であり、それは文明人の住める気候帯の南北の「幅」の広がりよりも距離的にずっと大きいから「長さ」と呼ぶのだ、というわけである。

AD三八九年の「廃仏毀釈」すなわち司教テオフィロスによるアレクサンドリア大書庫の焼亡破壊後、プトレマイオスの『地理学』はコンスタンチノープルで約一千年のまどろみを続けていたが、東ローマ帝国の危機を契機としてヴェネツィアでラテン語に訳出され、『宇宙誌』のタイトルで教皇アレクサンデル五世に献呈された。

しかしその大部分（第三巻から七巻まで）はオイクメーネの約



方格図の代表例『禹跡圖』(1137年 石刻)



プトレマイオスの世界図
「オイクメーネ」を示したもの

八〇〇〇地点の位置に関する情報、すなわち経度と緯度を主体とするデータ集なのであった。オイクメーネにある個々の地点が、地球というよりも天球に対してどのような位置にあるか、つまり緯度と経度の表記がその著作の基幹である所以である。たしかに伊能忠敬がプトレマイオスの『地理学』を参照することはなかったろう。しかし約一二〇〇にのぼる観測地点の記録である『大日本沿海実測録』ほかは「伊能図」の前提であって、その逆ではない。学術上それが「図」に先立つ意義をもつものであることは、これまでたどってきた世界認識の文脈からみて明らかであろう。

私たちは、ここであらためて「測量」という行為が、宇宙空間に設定された数字からなるヴァーチャルな系へのアクセスであることに思い至るのである。地を捉えるには視点を天空に転位する、というよりも天を凝視した結果が地を把握する、と言ったほうが正確であろう。だから観測の成果にのみ則していえば、暦と地図の関係は天体観測を母とするブラザーフッドに相当するのだが、直接的には暦のほうが出自は先であって、これまたその逆ではない。

中国の伝統的宇宙観を一言で示せば、「天円地方」というものであったことはよく知られている。簡易な観測によっても、天体が一定の円運動をなすのは万人が認めるところとならざるをえない。しかしながら大地の究極的形態に関しては話は別である。自然認識が素朴直接の感覚次元に膠着している間は、それが水平な延長をもち、広大に天の下にひろがるものとしてしか認識できない。天体観が、暦と帝権の必要性に応じて発達し、また停滞したとことと比較しても、さらに曖昧滞留した中国の大地に関する認識は、ついに自力ではこの素朴身体感覚

を脱することはできなかった。だからAD八〇年頃に表された『大載礼記』のように、「もし天が本当に円形をしていて大地が方形をしているならば、天と地の接する世界の四端をびったり覆うことができなくなってしまうだろう」と茶化す向きもあったのだが、このことは論理と実証として究められることなく終ってしまった。

独自に発達した中国の天体観測術とその成果が地上の座標系確立と結びつかなかったのは、「天円地方」という宇宙観とともに、その独特の地図作成技法である「方格法」が永く權威とされていたからでもある。さらにまたジョセフ・ニーダムが言うように「中国の曆の皇帝による公布は、西洋の支配者が肖像と銘を入れて鑄造貨幣を発行するのに相当する権利」であり、中国の天文学は結局のところ曆学だったために、国家の權利にして義務であるという「公的」な制約を負っていたのである。つまり古代ギリシアとは対照的に、天体観測は専制国家下級官僚の排他的行為であって、国家の「技」にして「具」という首枷をついに自ら外すことはなかったのだ。それは言いかえれば、私的な探求、つまり私にして普遍を希求するモチーフの生れ出るような社会領域はあり得なかったことになる。日本においても近世初期までは事情は同じであって、むしろ天地自然の認識事情はさらに立ち遅れていた。

江戸期体制教学（朱子学）の確立者林羅山は、慶長一一（一六〇六）年六月一五日京都南蛮寺を訪ね、イエズス会の日本人イルマン（修士）である不干斎ハビアンと論争した。『排耶書』はその記録であって、儒者の同時代的な反キリスト教論としては類のないものとされる。南蛮寺の室内に掲げられていた「円模の図」つまり「地球儀」は格好の

論争素材であった。

イエズス会は、中国や日本などの古いアジアの国々で布教するにあたって、ルネサンス以降長足の進歩を遂げたヨーロッパの科学・学術の成果を動員することを有効と認め、またその方法を採用していた。わが国の代表的イエズス会代弁者ハビアンは「船に乗って東にいけば西に行き着く」と、ミッシェンの主張をそのまま披露したのである。しかし林は口をきわめて大地球体説をのしり否定する。「東極これ西と謂ふは不可なり。かつまた物みな上下あるの理を知らず。（略）その惑ひ、あに悲しからずや。朱子のいわゆる天半地下を繞る。彼これを知らず。（略）我天地の間を觀に一物として上下あらざるはなし。彼、中をもって下となす。何ぞ物に各々上下ある理を知るに足らんや。（略）何ぞ上ならず、下ならざること之あらん」と。

洋の東西を問わず、観念的形式論はまことに秩序の牢固とした自衛弁証法であった。ヨーロッパでも地球説は聖書に反する異端であって、例えばアウグスティヌスはその著『神の国』の一六章で、「太陽がわれわれのところへ沈むときに昇っているような反対側の土地に住み、われわれと足が向かいあっている アンティポデス 対蹠人については、まったく信用する根拠がない」として、古典古代の学術達成を否定し去るのである。世界の原理を物理自然よりも人倫秩序の力学として捉える性向は二〇世紀末の東アジアに健在である。そうして何よりも、当時の日本における学術水準は、宗祖中国の世界観をなぞっていて何ら痛痒を感じない程度の未熟なものだった。日本の一七世紀はこと地球認識に関する限り、ヨーロッパの五世紀に齊しかったのである。

（この項つづく）

忠敬さんは歩測がお嫌い 〈一〉

女めあかし 永野 達代

開けてはいけない扉を開けてしまった。

江戸東京博物館で開催された伊能忠敬展に出展させて戴いた「忠敬歩測の道復元図」制作過程で仕入れた情報を、誌上ではきだせとのこと。そのようなことで、つい真面目になってしまっただけ禁断の扉のむこうを見てしまった。

心は重いが、忠敬さんの大チョンボ小チョンボを、白日の下にさらさなければならぬから、深く忠敬先生を敬愛なさる方は、お読みにならないほうがよろしいかもしれない。

歩測図から読む往路復路

まずは渡辺忠敬さんの中チョンボを誌上告発しなければ話は進まぬ。図1をご覧いただきたい。会員方の労作『忠敬と伊能図』は皆様持ちのことと拝察して、以下はページナンバーのみ記すこととする。

(四八・四九および一六六頁参照。)

隠宅から始まる黒線赤文字は矢印(文字の方向性)の方向へ進むと立川(堅川)を越えすぐに左折して司天台で終る。これが往路。

復路は反転して、赤線黒文字が司天台から始まり、浅草寺、吾妻橋を経て隅田川の左岸を南下している。この様子は容易にご理解いただけることと思う。

江戸博での打ち合せの席上、渡辺さんに忠敬がどう歩いたかをご説

明したら「ああ そうか こうこうこうだね」と、ご自分の指で地図の上をなぞっていらしたのに、何で清澄通りを北上し、吾妻橋を渡って云々になってしまったのだろう。(四八頁)

暦局の前を通ってという記述では、なんだか忠敬さんが師が待つ暦局の前を、横目に見て素通りしているようだ。学生時代の私ではあるまいし。

渡辺さんは皆様御存知のように伊能図のこととなったら針穴まで調べあげるお人なのになんでこうなったんだろう。

私は初会合の日、清澄庭園の涼亭で歩測図を手にした感動が忘れられない。勿論、伊能図を好きなのは皆さんと同じだが、忠敬さんみずから描かれたものは格別である。地図から何か優しい感じのものが手を伝わってきて随分エネルギーを持った方だったのだなあと考えた。

忠敬歩測の道

さて誌上告発が終わったらじっくり忠敬さんの行動を追ってみよう。

朝、自宅を出ると目の前は掘割である。掘割沿いの道を行き小さな橋を二つ渡ると、右手には寺町が続いている。伊能家の旦那寺である法乗院(えんま堂)もある。となりの陽岳寺は向井将監忠勝開基で現在も向井というお名前の表札が掛かっている。仙台堀を過ぎると左手は今の清澄庭園、寛政七年は久世出雲守の屋敷である。小名木川、堅川を越え左折して堅川沿いに西にむかい、誘惑の多そうな両国橋、柳橋を無事すり抜けて奥州街道、今の江戸通りへ出る。鳥越神社の御手洗川である鳥越川又は新堀川を渡るとすぐ左手二〇間ほど入ったところが浅草司天台である。今この川は埋め立てられて須賀公番が建っているが、公番の両側に道路があって妙な感じなのは江戸の地形の名残な

のである。

高橋至時のもとでの勉強を終え、広小路へだと奥州街道を北上する。右手は広大な幕府御米蔵。駒形堂、風雷神門（いまの雷門のこと。風神様がなくなっちゃった。江戸名所図絵には風雷門）仁王門（いまは宝蔵門）観音様、隨身門（いまは二天門。たしかこの門は忠敬さんがくぐった当時のままのはずである）と歩測をする。この年、三月十八日より六〇日間浅草観世音開帳そして風雷神門が再建されている。歩測図に風雷神門が描かれているから忠敬さんは木の香も新しい門をくぐったのであろう。

大川橋（我妻橋）を渡ると細川若狭守の屋敷。そして北の方は水戸藩の広大な下屋敷である。この庭園の一部が今、隅田公園になっている。藤田東湖の正気歌碑が建っている。

南へ戻るとまことに残念なことに、ここところは破損してよくわからないが、よく観るとちよこつと東側へ入っている。ここは多田の薬師堂と思われるが、なぜここを歩測しているのかは理解できない。

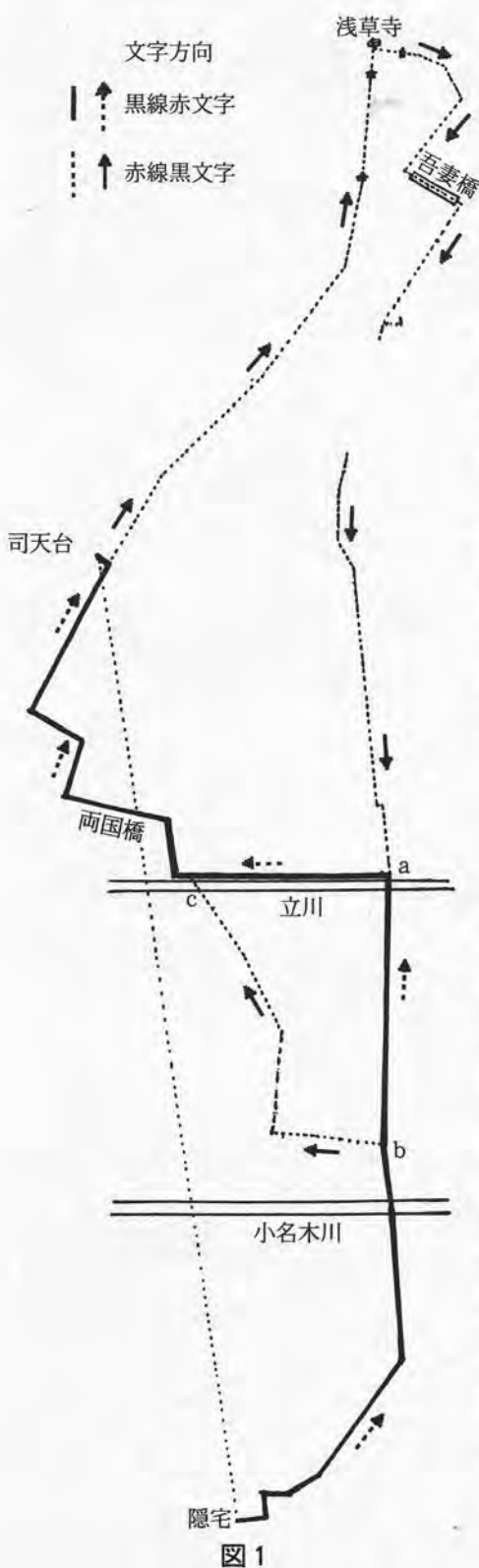


図 1

い。このお宝は、江戸名所図絵に描かれているので忠敬さんが境内で歩測をしている様子を想像しながら見てみるのも面白い。

御竹蔵は言わずと知れた江戸東京博物館が建っている場所である。はやくから米蔵になっていったそうだが歩測図も御米蔵になっている。旧安田庭園辺りはなかなか興味深いが寄り道になるので次の章にする。a地点から朝来た道を戻ってb地点へくると、突然右折して六軒堀をこえ御初蔵の堀にそって右折しc地点で止まる。

この不審な行動は何か。aを基点として時計方向に浅草をぐるりとまわってa、bときてcで閉じる、野々村国土地理院長が述べておられる（一〇頁）θではなからうか。はたしてこれでθといえるのかどうか私には判らないが。

ここから「大江戸うわさ話」という題で、集めた資料をもとにあれやこれや雑多なことを書くつもりだった。しかし魔が差したというかなんというか歩測図に記してある数字を、距離が書いてあるに決まっているのに、見ておこうという気になってしまったのである。

扉の向こうの大チョンボ

哀れ文盲の身としては、原稿執筆を厳命した安藤さんにおすがりして現代語訳していただいた。

伊能忠敬研究会といえども文盲率は九〇%前後と思われるので載せておきます。一支十等分で初というのは〇分だそうです。

エッ文盲はオマエだけです。ヘーッ失礼いたしました。

ご丁寧な解説と方位の読み方などお送りいただいた翌日、江戸博でお会いするや「ほとんど間で終わっていますねえ」「間ってあの間でいいんですね」と困惑して顔をみあわせた。

開いたとびらの向こうには〇間〇尺〇寸と整然とした数字が並んでいるはずだった。が、私の目に入ったのは雑駁な印象の図2である。皆様も読み進めないでここで図2をとくご覧ください。理解出来た方はいらっしゃいますか。

この数字は何を表しているのだろうか。これが歩測で得られた数字を表しているとしたら、自分が知らない尺度が使われているのではないかと、とても私の手に負えない。しかしここで放り出す訳にはいかない。涼亭で歩測図を手にした時に手を伝わって身体のかなかに流れてきた何かを思い出していた。忠敬先生を信じなければ。うわさ話どころではない。血みどろの闘っ引き生活が始まった。

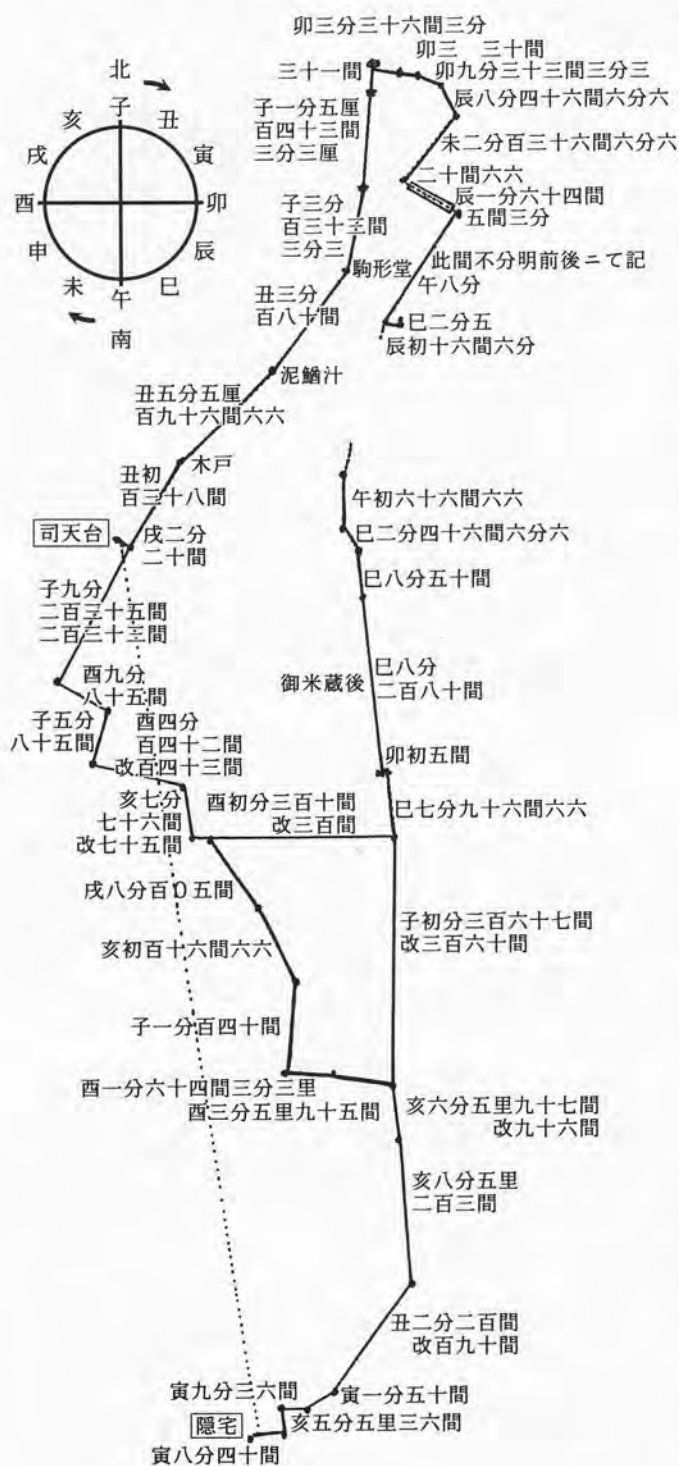


図2

大チヨンボの解明に挑む

まず方位を見てみると、方位を計る方向が図1の動線と一致するので行動経路は図1で正しいことがわかる。

次に思い切って数字を観察してみると、往路はすべて間で終わっている。どうやら規則性がありそうである。そこで整理を試みた。

【往路】

- ・最小単位＝間
- ・二回測っている。長い距離は改めている。一箇所を除き改は距離が縮んでいる。

【復路】

- ・最小単位＝三分三厘
- ・使われている単位は 間、六・六、三・三の三種類。
- 間＝一一箇所 六・六＝八箇所 三・三＝七箇所
- ・改は無い。
- ・目標物を描いている。
- ・橋の長さを測っている。

さて、これ等から導きだされることは、まず一目で解るのは往路と復路の性質がまったく違うことである。

そして理解できないのが、三・三と六・六である。これはなにか。尺や寸でないのは確かである。

三・三は一間の三分の一。六・六は一間の三分の二。つまり一間を三等分しているのではないだろうか。では、なぜ一間を三等分するのか。一間を三步で歩くことではなからうか。それならば往路の最小単位が間であるのも納得できるような気がする。

実際に複歩ならぬトリプル歩で歩いてみた。三步をひとカウントしながら歩を進めるのである。結果は複歩をするのとまったく変わらない。

しかし佐久間さんは(一四二頁) 忠敬の歩幅は一步六九・〇四センチという数字を出していらっしゃる。実際の三步の長さで一間の関係をみてみると

$$69.04 \times 3 = 207.12 \text{ cm}$$

$$207.12 - 181.8 = 25.32 \text{ cm}$$

実際の歩幅よりも二五・三センチ 一二・二％短く、実際の歩幅は一間三步に対しては二三・九二％長い。困った結果である。

渡辺さんの試算では(一六六頁) 一一・八％の誤差とか。

しかし他に一間を三等分にする説明が思いつかない。

そこで実際に歩測図に記されている距離をセンチに直したうえで誤差を修正し五千分の一の図を作り、私が作った五千分の一復元図の下図にあわせてみることにした。

$$69.04 \times 3 + 181.8 = 113.92 \%$$

渡辺さんが出された一一・八％という数字があるので二三・九二％はうまく行けば下図と同じぐらいか多分大きくなるだろうと予想したが、あに図らんやトレベ方眼紙に作った五千分の一歩測図は下図よりずっと小さいのである。一からやり直したが同じ結果である。

下図は国土地理院発行一万分の一地形図の二百％拡大＝五千分の一をベースにしている。

復元鳥瞰図はスケール・アウトしているのか。

首筋に氷を貼り付けられたようにゾーッとした。もう必死である。くるっているのは歩測図か地形図か。答えは次号へ――

大谷亮吉氏以来誤差をいわれる。私なりの原因の結論を次号に発表します。皆様も謎解きに挑んで違う結論をお聞かせください。

日経ほか各紙既報

都立中央図書館蔵「伊能小図」の発見から展示へ

渡辺 一郎

江戸東京博物館の「伊能忠敬展」をあと一週間にひかえて何となく気ぜわしい四月一五日、北海道の会員の高木崇世さんから電話がかかってきた。「渡辺さん、江戸博に英国から伊能小図がくるそうですが、都立中央図書館に最終版小図の本州東部と日本西南部があるのを知ってますか」「それは驚きだ。すぐいってみる」。

電話を切ったときはほんとうに驚いた。この一年間に、気象庁から大図写本四三枚発見、東京国立博物館で九州第一次測量地域の大図二一枚、中・小図各一枚発見と大形の伊能図発見が続いたあと、いよいよ江戸東京博の「伊能図展」が始まろうと云う矢先である。

まず、江戸博図録「忠敬と伊能図」の英国小図のキャプションを確認する。「三枚セットはこれだけ」とあり、本州東部はこれだけと書いてないので安心する。

翌一六日、早速、都立中央図書館の特別文庫にゆき、閲覧調査の結果、間違いなく伊能小図の良質な写本と認定。責任者の森課長不在につき、係員に事情を説明するとともに「江戸博展とのからみもあるので新聞に通告します」と念を押して帰る。

たまたま、日本経済新聞が伊能忠敬研究会の活動を記事にするため、私と佐久間達夫氏を取材中だったので、翌日電話を入れる。私は、二〇日江戸博周辺でNHK総合テレビの撮影に出演、あと江戸博内覧会、ここで板谷学芸員に耳打ちしておく。二一日、江戸博の初日を眺める。夜、日経の松本記者がきて内容を確認する。

四月二三日、日本経済新聞朝刊の文化欄「文化往来」で紹介される。都立中央図書館林課長より電話。「日経に出たけれど、あらためて新聞発表したいが」と意見を求められる。もちろん賛成。「日本にない」とされていた伊能小図がみつかったのであるから」とすすめる。

五月一三日、林課長が研究会に来室、新聞発表内容について打ち合わせ。五月一六日に江戸博の講演と討論の会で、私がこの小図について話すことを公表していたので、五月一四日になって明日発表すると林課長から知らせがある。この間、役所の手続きはさぞたいへんだったと思う。

予定通り一五日に都教育庁で新聞発表され、報道各社からつぎつぎに問い合わせが入ってきた。読売、毎日、朝日、産経、東京、ジャパントゥタイムスから追加情報を求められ、翌日朝刊の記事となった。

都立中央図書館蔵「伊能小図」

本図は本州東部と日本西南部の折本二舗である。ほかの伊能図と同じく地図に標題はなく、折本の表につぎの題がある。保管者が勝手につけた名前である。このようにして伊能図の認識が難しくなる。

実測輿地全図

五畿内・東海道 折本 縦四一・五×横三一・五センチ
北陸道・東山道

神州

実測輿地全図

山陰道・山陽道 折本 縦四二×横二五センチ
日本西南部
南海道・西海道

西南部の地図裏に奥書が貼付してある。

実測神州与地分図 二枚

此者阿部勢州公執政の時、天文台に

命じ写せしもの由大槻先生より

承り候得 記し置もの也

ここにいう大槻先生は大槻如電である。地図表面に大槻氏印という蔵書印があり、如電の蔵書印と合致するから間違いない。勢州公は阿部伊勢守正弘で、一八四三年から一八五七年まで老中の職にあった。天文台は天文方と同じである。一八四一年に渋川助左衛門（高橋景保の弟・善助の後身）が九段にも天文台を設けているからどちらの天文台に命じたかは定かではない。

大槻如電は明治の洋学者で、忠敬とも親交のあった大槻玄沢の曾孫にあたる。私はかつて、大谷亮吉の『伊能忠敬』六一〇頁の伊能小図の所在の項に「英国海軍省に存する写本は文久年間、幕府が英国測量艦長に与えしものにして、大槻如電の蔵するものは松平伊勢守が命じて謄写せしめたるものなりという 云々」とあるのを見て、大槻如電旧蔵の伊能小図を捜したことがある。大槻如電の旧蔵書はほとんど大槻文庫として静嘉堂文庫に所蔵されるので、同文庫に依頼して小図を探していただいたが見つからなかった。いっぽう、松平伊勢守という大名・旗本を探してみたが、旗本に数人いるが、いずれも人物が合致しないので調査は行き詰まっていた。

この地図の奥書にある阿部勢州が松平伊勢守なら、大谷氏の説明とピッタリ合致する。阿部正弘の後裔の正道氏（文京区本郷西片町）に電話をいれ、阿部家に松平姓があったかどうかを確かめた。無いということであった。現物はたいへん出来の良い写本である。旧蔵者は大谷氏の思い違いということであろう。

本州東部 縦二四三×横一六五センチ

この図のことを本州中部とこれまで呼んできたが、内容的には本州東部のほうがよいようである。今後、本州東部としたい。

描画範囲は英国の小図と同じである。英国図とちがって淡彩である。国名を囲む四角の枠内を朱で塗りつぶしているのので、一見した感じは神戸市立博物館の小図にちかい。（英国グリニッチ小図は国名の枠内は塗りつぶさない）描画はたいへん丁寧で、たとえば朱の測線は太めで、太さが均一で筆継ぎのあとが分らない。国界は他の伊能図は朱の太線であるが、本図は枠を墨で書き、中を薄紫で染める。おそらく、朱の測線との紛らわしさを避けたのであろう。

地図合印は、宿駅○、郡界●、寺院△、城下□、港ㇿ、神社ハ、など揃っており、英国小図にはない天測地点☆も記されている。これにより小図にも☆の記入があったことがわかる。文字はすばらしい達筆で、山景はグレーがかった緑である。

保存も完全である。折り目の交点に穴があいた部分もあるが全体に傷みは少なく、美麗である。大正六年一月三〇日に日比谷図書館に入庫、昭和五八年一月一九日都立中央図書館に転籍された。

私も何かの記録で日比谷図書館に伊能図があると知り、二〇年以上前に日比谷図書館を探した記憶を思い出したが、標題が伊能図となっていないので世の中に紹介される機会がなかったものである。このような伊能図はまだたくさんあるとおもう。宝探しではないがチャレンジして欲しいと考えている。

日本西南部 縦一九六×横二六七センチ

本州東部とセットの小図で描画形式は同じであるが、制作者が異なる。文字がやや劣り、関門地区には文字のカスレがあり、九州全般に鮮明度はやや劣る。折り傷、虫少しあるが読図に支障はない。入庫は本州東部と同じである。

本図が話題になってすぐ、江戸東京博物館と都立中央図書館の御好意により、展示変更をして六月第二週から「伊能忠敬展」に出品されたのはたいへん見事な連携プレーで、心から敬意を表したい。

文化往来

今年は近代的日本地図の先駆者、伊能忠敬の没後百八十年。民間研究者を中心に伊能忠敬の日本沿海興地(よち)全図(伊能図)の新発見とその人間像に迫る研究発表が相次いでいる。

伊能忠敬没後180年、研究・発表盛ん

伊能忠敬研究会(渡辺一郎事務局長)は、イタリア地理学協会に伊能図が所蔵されていることを発見した。海外での伊能図所蔵は、英に続いて三方国目。明治政府が初期にイタリア総領事に渡したもので、地名がカナで記されている。

という。国内でも幕末の老中、阿部正弘が複製を命じたとされるが、存在が未確認だった四十三万二千分の一の本州中部部分の地図「経緯者」(渡辺事務局長)といつが新たに見つかった。開国から維新にかけて、伊能図が政治的に重要な役割を担ったことを示す。ストーリー代わりになる。愛好者が増えるなど静かなブームと呼んでいる。

今年、伊能図を実際に見る機会も多い。江戸東京博物館では六月二十一日までの予定で伊能忠敬展を開催中だ。また国立国会図書館は昨秋発見された伊能図の写本四十三枚をデジタル映像化して展示するという。

日本経済新聞(九六・四・三)

Two copies of Ino maps discovered in library

Two hand-drawn copies of maps made by Ino Tadataka, the first modern cartographer to create precise maps of Japan during the Edo Period, have been discovered in the archives of the Tokyo Metropolitan Central Library, officials said Friday.

One precisely depicts central Honshu from Aomori to Osaka in color; the other shows southwest Japan from Osaka to Kyushu.

No copies of the former were believed extant in Japan; the only other known copy is being kept at a British museum.

"I was so excited because I never thought (any of these were) in Japan," said Ichiro Watanabe, an expert on Ino maps who made the discovery. "And (it was) in Tokyo's own back yard."

The two belong to a set of three maps known as "shozu (small map)." Worldwide, only six copies of the shozu were known to exist.

Ino (1745-1818) drew his maps as he wandered across Japan, focusing in particular

on areas along coasts and main roads.

All of the original maps are believed to have been destroyed in fires, but some hand-drawn copies survived.

It is thought that the two recently discovered maps were drawn by the order of Abe Masahiro, the chief shogunate councilor who signed the Japan-U.S. friendship treaty in 1854 to end the nation's seclusion under the Tokugawa Shogunate.

Watanabe said Abe might have issued the order out of pressure from many Western powers for Japan to open its ports to trade and diplomatic relations.

The maps include hundreds of town names and other geographic features. The central Honshu version measures 245 cm x 164 cm, while the other measures 195 cm x 168 cm.

An exhibition of Ino maps is open at the Edo-Tokyo Museum in Tokyo's Sumida Ward until June 21, and the library is considering working the newly discovered maps into the display.



THE SOUTHERN KANTO AREA is depicted on a newly discovered copy of a map drawn by Edo-Period cartographer Ino Tadataka. TOSHIKI SAWAGUCHI PHOTO

ジャパントイムス(九六・五・二)

江戸博「伊能忠敬展」併催 忠敬歩測練習の道歩測大会成績

伊能忠敬研究会

伊能忠敬展と併行して、(社)日本歩け歩け協会・東京都歩け歩け協会および伊能忠敬研究会の共催によって、「伊能忠敬展」会期中に四回行われた忠敬の道歩測大会は、三回も雨にたたられながら、七百名あまりの御参加をいただき、新聞・テレビ各社でも大きく取り上げられ盛会となりました。

忠敬の道の全長は、江戸博、忠敬宅跡、富岡八幡宮、両国橋、暦局跡、浅草観音、吾妻橋、江戸博を結ぶ約一〇キロ。この間に、歩測場所として忠敬宅跡、両国橋、吾妻橋の三カ所に各五〇〇メートル程度の区間を設定して歩測大会をおこないました。

参加者のうち、伊能忠敬に挑戦して歩測表を提出した方は五〇九名でした。データを精査して、左の方々に歩測名人ならびに歩測達人のタイトルを進呈しました。

歩測名人	久米 孚 (四月二五日)	南 脇子 (六月一四日)
	中村 建策 (四月二五日)	田川 雅子 (六月一四日)
	富田 英資 (五月三一日)	菊池 富寿 (六月一四日)
歩測達人	泉 嗣彦 (四月二五日)	中村 礼子 (四月二五日)
	安達 昭一 (四月二五日)	大野 守二 (四月二五日)
	杉浦 和義 (五月一〇日)	上松 二郎 (五月一〇日)
	石野 哲也 (五月三一日)	佐々木 弘 (五月三一日)
	野田 和夫 (五月三一日)	小泉 重昭 (五月三一日)

西村 弘一 (五月三一日)	熱田 遥 (五月三一日)
安田 達男 (五月三一日)	平井耕一郎 (五月三一日)
梶田 正子 (六月一四日)	木谷 道宣 (六月一四日)
藤岡 時彦 (六月一四日)	堀川 弘幸 (六月一四日)

歩測名人とは、三箇所のうち良い二箇所をとおして誤差が〇・五%以下(一〇〇〇メートルにつき五メートル以内)で、各個所の誤差が一・〇%を超えない方を対象としました。ちなみに、忠敬の地図の誤差は〇・二%くらいですが、歩測だけで作ったわけではありません。今回は歩測距離が短いことを割引しても立派なものです。

歩測達人については、三箇所のうち良い二箇所をとおして誤差が一%以下(一〇〇〇メートルにつき一〇メートル以内)で、各個所の誤差が二・〇%を超えない方を対象としました。

本大会の歩測箇所の実値は、国土地理院の関東地方測量部・川田次長指揮の測量班により、百万分の一の精度で測定されております。また、第一回大会では雨の中で現代測量の実演をしていただきました。参加された国土地理院の技術官各位に厚く御礼申し上げます。

成績の判定は、歩測表に書かれたデータを、日本歩け歩け協会の加川主任指導員がパソコンに入力して作成した精査用データにもとづいて行いました。ありがとうございました。

大会中、歩測のやり方の説明ビデオの上映、ならびに忠敬宅跡付近の歩測場所の案内は、伊能忠敬研究会で担当しました。雨中にも拘わらず、東京近辺の多数の会員の方々に当日役員として御協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

ニュース速報

●九月二日(土) 佐原の新記念館見学をかねて、伊能忠敬研究会総会を開く予定です。当日は「歩け歩け」の行事と一緒にあります。前日から佐原に宿泊を希望の方は、早目に事務局へハガキ又はFAXでお申込み下さい。先着一〇名位まで、用意できます。

なお、当日の詳細な予定などは、追ってお知らせ致します。

●本誌第一四号一九頁で御案内した『伊能忠敬書状』(千葉県史料近世篇文化史料一)は(財)千葉県史料研究財団で入手できるそうです。

本代 二、〇六〇+送料 三四〇=合計 二、四〇〇円 です。

〒二六〇一〇〇一三 千葉市中央区中央四の二五の七

TEL 〇四三一二一五二〇〇 (高島賢治)

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

①本会報の発行 当三年四回。

②例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。

③その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 〇〇一五〇・

六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

●伊能忠敬研究会・ホームページ

URLは、<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

担当 大友正道

*本誌の編集委員は次のとおりです(50音順)

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禮良(前佐原市教育委員会次長)・小島一仁(佐原市史編纂委員長)・齋藤仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭・法政大学講師)・芳賀啓(柏書房専務取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探究会代表・会社会長)

編集後記

●「秋山ちえ子さんがラジオで、伊能忠敬展のことをとても褒めてくださったから、聞き逃した方のために是非一言、会誌にお書き頂けたら…」と会員の武田さんご夫妻からの電話。面識のない秋山先生にどうお願いしたらよいのか思案したがい、思い切ってお手紙を書いた。ヨーロッパ旅行でお疲れのところ、快く原稿をお送り下さり、感謝感激。その後、お目にかかった折の、八一才とは思えない先生のさわやかな活力には忠敬先生も負けそう、と脱帽です。

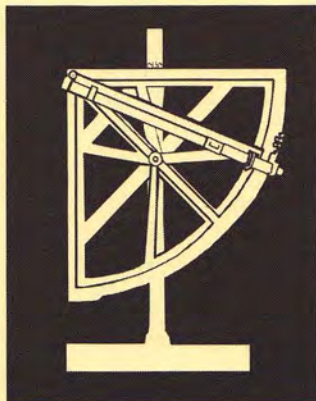
●「苗代川」の原稿をまとめた後、鹿児島行の機会を得た。一枚の古文書のお陰で、幸運にも沈壽官氏にお目にかかれ、鹿児島県歴史資料センターの徳永氏のお話しも何う事が出来た。その地で触れる歴史の重み、奥深さは格別で、今更ながら私ごとがと自信喪失、立ちすくみ状態である。

(伊)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.16 Summer 1998



ESSAYS

- A Memorandum as to Ino Tadataka KODAMA Kota 1
Very Nice Exhibition Plan AKIYAMA Chieko 3

TABLE TALKS

- About the Exhibition and the NHK TV Program 4

TOPICS 1

- The Questionnaires of the Exhibition 7

LOCAL MATERIALS

- A Document of Nakajima-cho, Ehime Prefecture ITO Eiko 9

MATERIALS

- Family Documents 9
KUWAHARA Takatomo ANDO Yukiko 13
Naeshirogawa INO Yoko 17
From Visitors' Registers INO Hiroshi 19

STUDY NOTES

- History and Ino Tadataka 2
Quest of Longitude and Latitude HAGA Hiraku 21

ESSAYS

- Was pacing off a week point for Mr. Ino? NAGANO Tatsuyo 25

TOPICS 2

- Discovering Maps and the Exhibition WATANABE Ichiro 29
Records of a pacing off assembly 32

- OTHER NEWS 33

Edited and Published
by
THE INO TADATAKA SOCIETY